

第4章 女性と労働

I. エジプトの社会変化と 女性労働力の発展過程

まず、近代エジプトにおける女性労働を論じたエジプト人の文献をみると、そのほとんどは、歴史上特筆される女性、あるいは女性教師、女性公務員、大卒女性、女性ジャーナリスト、女性芸術家、女性警察官、女性パイロットなど、新しい分野に果敢に進出していった女性を中心に紹介する傾向が強い。特筆するとすれば、わずかにヤヒヤ(M. K. Yahya)の『近代におけるエジプト女性解放の歴史的起源』(A275)だけが、ムハンマド・アリー期の女性が置かれた状況に関して、農村女性、都市女性、女性奴隷、男性との関係などのテーマについて詳しく叙述している。

また、タッカーの『19世紀エジプトにおける女性』(E214)は、当時のシャリーア法廷の記録に基づき、下層の女性たちが、訴訟という公的手段を利用して彼女らの権利や財産を擁護することが可能であった点などをあげ、女性の公的社会におけるたくましさや強さの側面を指摘するものである。

タッカーは、エジプトや西欧のほとんどの歴史学者が、これまで女性史に触れることなしに歴史を論じてきた姿勢を批判する。たしかに、近代エジプトにおける底辺女性の社会的経済的活動を論じた研究は、これまで皆無と言ってよいほどであった。

次に、20世紀前半の女性運動、女性の置かれた状況を中心に論じた文献では、ムハンマド(A. T. Muhammad)の『エジプト女性：過去と現在』(A264)、アフマド(A. T. Ahmad)の『女性：闘争と運動』(A225)、サーリム(L. M. Sālim)

の『エジプト女性と社会変化：1919～1945』(A244)、ハリーフア(I. Khalifa)の『近代女性運動』(A243)、アフラトゥーン(I. Aflāṭūn)の『私達、エジプト人女性』(A227)、ラムズィー(N. Ramzī)の『労働分野へのエジプト女性の進出』(A243)などがあり、エジプト人研究者によるものが多い。これらすべての文献は、農業部門において女性も夫や家族と同様に農業労働に従事していたことを認めている。しかし、農業や家庭の外に出て働き金銭を得る女性は、日々の糧を得るための必要に迫られた貧しい女性層に限定されていたという。

では、ムハンマド文献(A264)から当時の女性労働の状況について概観してみよう。

ムハンマド・アリー期には、男性の徴兵による労働者不足のため、女性や子供もカナートル(堰)建設などの治水工事や軍人の家庭の家政婦として働くようになった。また、1902年には、トルコ帽子工場の他、精油、製粉業、菓子製造業、煙草工場などでも女性が働いていたことが報告されている。当時の労働環境は非常に劣悪であり、女性労働者に対する法律は何ら整備されていなかった。そしてようやく1925年に国会内に労働者・農民権利保護委員会(Lajnat al-difā' 'an ḥuqūq al-'ummāl wa-fallāḥīn)が組織され、女性労働者の権利や保護などを含めた労働法の準備が開始された。その後、1933年には女性労働整備法(qānūn bi-tanzīm tashghīr al-mar'a)が制定され、女性労働の保護、特に、危険な工場や深夜労働における女性労働の禁止や有給の産時休暇などが認められることとなった。30年代初めにこの法律の適用を受けた女性労働者の数は、約5万人とみられる。さらに、

1936年には1日の労働時間は9時間に制限された。特に第2次大戦期には、連合軍関係の施設で約4000人の女性が働き、また外国人居住者用の家政婦や、ホテル従業員などのサービス業において女性労働力の需要が増えている。これとともに、女性の労働組合員数も増え、1946年には、「エジプト女性労働者組合」が組織されるに至ったのである。同組合員らは、エジプト労働組合会議に参加し、週40時間労働、男女の賃金の平等を要求した。当時の女性の労働環境については、「平等の労働で平等の賃金」をスローガンにして女性の経済的権利を要求した、女性解放活動家で共産主義者としても知られているアフラトゥーン文献(A227)に詳しく記されている。

1952年革命を機に、女性参政権の賦与、労働・教育における男女平等が制定され、労働参加ばかりでなく女性問題全体に大きな進展がみられた。特にナセル社会主義以降の女性雇用の発展については、多くの調査や研究がみられる。

まず、統計学的に女性労働力の推移を分析した文献では、国家中央動員統計局(Central Agency for Public Mobilization and Statistics：以下CAPMAS)の『20年間におけるエジプトの女性、1952～72年』(A236)(E183)、フェルガニー(N. Fergany)の『アラブ女性と国家開発：人口学的背景』(E186)、上記のラムズビー文献などがある。CAPMAS文献は、女性の状況を家族・人口・教育・労働力・女性労働力の保護などに関して統計学的に分析したものである。たとえば、労働力については1961年と1971年の統計を比較分析し、この10年間に女性労働力の飛躍的発展がみられ、農業労働力が減少し工業労働力が増大した点を指摘している。しかしこの分析は、女性労働力の増加を結論づけるだけで、人口増加との関係や男性労働力との比較がなされていないため、女性労働力の発展の

全体を描くものとはなっていない。

これに対してフェルガニー文献(E186)は、1961～69年の女性雇用について労働力調査をもとに分析したものである。この研究によると、この期間には全労働力に占める女性労働力の割合は、毎年6.5%でほとんど変化がみられないという。この理由として著者は、女性労働者の教育レベルが変化したため、技術・熟練職に女性労働力が増加していったとみている。

また、ラムズビー文献(A243)は、1950年代から60年代における農村および都市の女性労働者について職業別構成、年齢別構成、また教育、社会環境などに関する豊富なデータを提供するものである。

これらの研究のほとんどは、労働力に占める女性インテリ層の割合の上昇を指摘している。これは、教育職、技術職、事務職における女性労働者の割合が上昇したためである。確かに、女性教育の発展とともに、労働面でも中間層の女性には大きな進展がみられた。では、エジプトの社会経済変化と関連させて全女性労働力の推移を論じた文献にはどんなものがあるだろうか。

たとえば、『エジプトにおける女性労働者の方向性：1960～1976、社会人口学的研究』(マルコス[W. Marquş]著、社会犯罪研究センター刊)(A268)は、1960年から76年の女性労働力の推移について分析したものである。これによると、この時期には女性労働者数は増加しているが、全労働者数に対する割合はむしろ減少しており、逆に女性失業者が実数、割合とも急増していることがわかる。もちろん、1966年から76年には、男性失業率も上昇しているが、しかし女性失業率の方がかなり高い。著者は、女性の教育参加の上昇が労働力参入を遅らせたという見方よりも、就労を望む女性の数が増加したが、実際には雇用機会が少なかった点を指摘する。すなわち、

この問題は、エジプト社会の家族的・イデオロギー的構造に起因するものというより、むしろ女性労働力を吸収することができない経済構造の問題であると見なしている。マルコスは、女性全体における労働参加の相違について次の3点をあげる。

- (1) 一般的に、教育程度の高い女性ほど労働参加率が高い。たとえば、1976年には女性全体の0.1%を占める大卒女性が女性労働力の14.1%を担い、大卒女性の74%は労働力に参入している。同時に、中間層の教育を受けた女性は特に就労意欲が高く、他方下層の教育を受けていない女性は労働から遠ざかっていく傾向がある。これは、経済活動において教育を受けた女性とを受けていない女性との格差拡大を意味する。しかし、下層の女性のほとんどは、季節労働、臨時労働などインフォーマルな分野に従事しているのも実状である。
- (2) 既婚女性労働者の割合が増加し、結婚後、または出産後も労働を継続する傾向がある。
- (3) 社会の近代化現象が、質的・量的にも拡大し、女性が家の外で働くことを容認する傾向が増加している。特にこれは都市にみられる傾向である。

すなわち1952年革命以前には、下層の女性が農業労働、家政婦、工場労働に従事する傾向がみられたが、革命以降には、教育を受けた中間層以上の女性労働者が増加するという、根本的な変化が起こったと言える。

- では、なぜ農業部門での女性労働者が減少したのだろうか。著者は、この理由として(1)エジプト農業が、家族的農業から賃金労働に依存する資本主義的農業に移行したが、農村においては女性の賃金労働を嫌う習慣があること、
- (2) 機械化農業への依存が次第に高まったが、新技術に対する女性の訓練が立ち遅れたこと、
 - (3) 農産物の販売は女性の重要な役割であっ

たが、農業協同組合によって運営される、より拡大された販売システムに変化したため、女性の役割が減少したことの3点をあげる。つまり、農業形態、技術、流通システムを女性労働への影響のメカニズムとしてあげ、これらの変化にもかかわらず、農村女性の状況、女性に対する社会的慣習は旧態依然のままであり、農業の変化から取り残されたとする見方である。

一方、工業部門をみると、手工業に従事する女性労働者の割合は減少し、それ以外の製造業で働く女性労働者の割合が増加している。この現象は男性にもみられるが、女性により顕著に現われている。この時期は軽工業から重工業への移行期であり、そのため軽工業部門の縮小によって女性の労働機会が減少したと著者は見なす。このような就業構造の変化は、女性のサービス業にさらに明確に現われ、ブルーカラーの割合が減少し、ホワイトカラーの割合が増加している。これについて著者は、教育を受けた中間層の女性が工業、サービス部門に進出し、教育を受けていない下層の女性の就業機会が狭められ、家事労働に帰っていったと説明するものである。

このように、1960～70年代の女性労働力の変化をみた場合、女性の労働参加率は減少したが、女性教育の発展によって女性労働の種類が多様化し、特に知的職種への参加が増加したことも事実である。

さて、エジプトの女性労働力の変化について論じる場合、上記のマルコスにみられるような経済学的分析以外に、社会学的な手法で分析するもうひとつの傾向がみられる。

たとえば、ユーセフの『発展途上地域社会における女性と労働』(E218)や(E215)～(E217)は、社会学的手法に立って1960年代のエジプトの女性労働力の発展状況を論じたものである。これによると、中東女性の非農業労働への参加

パターンは、他の発展途上国にみられる最近の経験や、また、西欧工業国の歴史的経験とも相違しているという。たとえば、エジプトの女性労働参加率がラテンアメリカなど他の発展途上国に比べてかなり低い点、とりわけ、繊維工業など、軽工業に特徴づけられた工業労働の女性参加率がかなり低い点などを指摘している。著者は、その要因をイスラームに由来する社会的側面から捉える。すなわち、エジプト女性の家庭外における経済活動への参加の程度が低いのは、イスラーム社会の特徴、すなわち女性の領分は家庭であり、家庭外での労働や公的な問題は男性の領分、というような性別分業が反映したものであるとする。特に、家族内の男性が女性の経済的責任を負わなければならないというイスラーム的家族制度が、女性の家庭外での賃金労働を制限し、また女性自身が社会的非難を避けるために労働参加を意識的に忌避してきた点を指摘する。特に、女性教育の発展と労働参加の関連について、専門職・技術職への女性の参入が増加したのは、男性との接触を避けようとするイスラーム諸国特有の傾向であると述べる。その結果、非イスラーム諸国において一般に女性が多い工場労働者、受付、給仕などの職種においても男性の独占を許したという。

一方これに対して、経済学的に分析する研究者らは、女性の役割について一枚岩のイスラームに包含された文化的価値観、すなわちイスラーム的家族構造をその決定的要因として捉える姿勢には批判的である。彼らは、世界経済とエジプトとを関連させて女性労働への影響を論じる傾向が強い。このような文献には、グラン(J. Gran)の『エジプト女性に対する世界市場の衝撃』(E188)、タッカー(J. Tucker)の『労働力におけるエジプト女性：歴史的サーベイ』(E213)および『19世紀エジプトにおける女性』(E214)などがある。

たとえば、タッカー文献(E213)は、エジプトの近現代史における経済システムの変化との関連において女性労働の変容を分析する。すなわち、19世紀の農村女性の労働と家庭生活における役割や、職人、商人として働く都市女性、あるいは女性奴隷などのいわゆる都市下層や農村女性の社会生活に焦点を当て、女性の地位の変化を次のような5つの段階に分けて説明する。

- (1) 1820年代以前：男女の協力と共生という関係に立ちながら、労働の種類によって、いわば、水平的な男女間の分業が行われていた時代。
- (2) 国家統制的な工業化時代：ムハンマド・アリーの徴兵制、賦役制の導入によって男性労働力が減少したのに伴い、女性や子供が農業労働や農産物加工および販売に従事し始め、国営工場の賃金労働者として家庭の外へ出ていった時代。
- (3) 西欧列強の干渉、すなわち1840年以降の綿花を基盤とした輸出志向経済の時代：換金作物農業の導入によって農業労働は、女性や子供による家族労働から賃金労働に変わり、女性は収穫期に雇用されるだけになって、農業生産と女性の関係に根本的な変化が現われた時代。
- (4) 輸入代替工業化：1920年代以降、繊維産業において重要な労働力であった女性が、その後機械化が進むにつれて機械の技術訓練を受けた男性に徐々に置き換えられていった時代。
- (5) 計画経済：社会主義の導入によって女性労働の奨励、労働環境の改善に向けたプロジェクトや、農村に職業訓練センターおよび家内工業プロジェクトが組織されたが、慢性的な失業問題によって女性雇用は、男性の雇用機会を減少させるものとして歓迎されず、60年代初期の政府の政策や関心が徐々に後退し

た時代。

彼女は、エジプトの近代化・西欧化の過程である資本主義経済への移行や近代国家の形成が女性の地位に及ぼした影響をいわゆる「従属理論」的な立場で論じるものである。

II. 1970年以降の女性労働の 法的権利

1970年以降における女性の労働権については、小冊子『エジプト女性の法的権利：理論と適用』（エジプト女性問題グループ [Majmū'at al muhtammāt bi-shu'un al-mar'a al-miṣrīya] 編）(A263)、ヒルミー（'A. Ḥilmī）の『エジプトの女性と実定法』（A239）が、法令、法解釈および適用の現状を簡潔にまとめている。1970年代以降に改正された女性に関する労働権を抜粋してみると以下ようになる。

国家公務員労働組織法（1978年47号）

および公営企業の労働組織法（1978年48号）

- * 妻または夫のどちらかが外国で働く場合（少なくとも6カ月以上）その期間中に無給休暇の取得が可能。
- * 子供の保育期間として無給で2年間、雇用期間中に、3回までこの休業の取得が可能。ただし、社会保険法により、同休業の取得中においても保険料は、本俸に基づいて支払わなければならない。
- * 産後特別休暇（有給）は3カ月。雇用期間中に、3回まで取得が可能。
- * 子供の保育期間中、半日休暇を本俸半減において取得が可能。ただし、同休暇の取得中においても社会保険法により、保険料は本俸に基づいて支払わなければならない。

1981年137号労働法（民間部門に関して）

- * 労働省の決定の範囲内で定められた労働、ま

たは労働状態以外においては、朝7時から夜8時の間以外の就労は認められない。

- * 女性は健康を害する業務、または重労働、並びに労働訓練省によって定められた業務の範囲以外での就労は認められない。
- * 6カ月以上雇用された女性労働者は、産後休暇として、50日間の有給休暇を取得する権利があり、予定日にまたがった休暇に関しては、予定日前の期間も医師の証明書の提出を条件に、産前産後、合計50日間の休暇が可能である。
- * 出産後18カ月間は、女性労働者は授乳の権利がある。これは、定められた休暇期間に沿って、1日2回各30分間、またその2回をまとめて取る権利がある。労働時間に付加されたこれらの権利は本俸に換算され、いかなる減給も生じさせない。
- * 5年またはそれ以上働いている場合、女性労働者は無給で1年を越えない休業を取得する権利がある。これは子供の保育のためであり、雇用期間中3回までこの休暇が許可される。
- * 100人、またはそれ以上の女性労働者を雇用する雇用者は、各就業場所に労働力職業訓練省の決定にそった範囲内での条件・環境の下に保育所を設置し、保護しなければならない。

1982年27号鉱業、石切業労働雇用法

- * いかなる地下労働においても女性を雇用してはならない。

また、エジプトは女性差別撤廃等に関するILO協定を批准し、1981年に434号法で、1)労働における男女平等、2)経験の程度に応じて、同等の雇用機会を享受する権利、3)職業選択の自由の権利、及び、昇給、待遇、福祉の権利、職業訓練の権利、4)同一職種に従事している場合での賃金、昇給、待遇の平等、及び労働の

種類における平等、5) 退職・失業・疾病・高齢者に対する社会保障の権利、6) 健康管理、職業安全、妊娠した女性労働者の保護の権利、等を定めている。

1978年の47号法と48号法は、女性の育児休暇または育児休業を大幅に認めている点に特徴がある。海外出稼ぎの際に夫または妻を同伴するための無給休暇を許可した法は、政府の出稼ぎ奨励策のひとつと思われる。実際には妻の出稼ぎに夫が休暇を取って同伴する例は希であり、むしろ、夫の出稼ぎに同伴するために女性が休暇を取ることに主眼があったが、一方で、公的部門の余剰女性人員の削減のための政策とも言われる。

さらに、女性の育児のための半日労働半額給料制度（以下、「半労半給」制度と略）および2年間の無給育児休業制度が成立している。この制度の成立に当たっては、世論の物議を巻き起こしたのでここでその経緯を紹介してみよう。

この法律制定前の1977年人民議会に、育児のために女性労働者を強制的に半分の給料で3～5年間家庭に専念させようとする提案がなされている。これに対して、女性指導者の多くは反対しているが、アル・サイード(A. al-Sa'īd)もそのひとりである。彼女は、女性専門誌に『女性労働者に提案されている法について』(A246)と題し、この法案によって人口爆発が拡大する危険性があり、家族計画に向けたこれまでの努力が破綻するおそれがあること、さらにこの法案は社会が女性労働力を必要としていないことを示すものではないかと述べ、反対を表わしている。また多くの反対論者は、長期育児休業・家族休暇を取得している間に、女性の能力が低下し、労働技術が損なわれてしまう可能性を指摘している。そしてこのような相次いだ意見や批判のため、上記のような強制力を伴わない育児休暇取得の権利へと法案の内容が変更された

のである。

さて、多くのフェミニストがこの「半労半給」法案に関して論じている。まず、この法案についての世論調査が社会犯罪研究センターによって行われ、『半分の給料で女性を家庭に帰すことに関する世論調査』（ファラジュ [S. Faraj]、ラムズィー著）(A259)に詳しく報告されている。この調査は、20～45才の既婚の女性労働者およびこれらの女性労働者の夫を対象としたものである。これによると、約8割が家庭に帰るのは女性の選択権であり強制ではないという条件付きで、妻の52%、夫の54%がこの法案に賛成している。特に高等教育を受けた中間層にその傾向が強く、著者はその理由として働く女性が抱えている子供の保育問題を指摘するものである。この調査結果から、女性運動家と現場で働いている女性の意識のずれがあることがわかり興味深い。

ハリーム(N. Ḥalīm)の『女性労働者の諸問題』(A240)もこの問題について同様の結論を導きだし、「半労半給」制度で女性を家庭に帰すことより、むしろ保育施設の必要性を指摘している。

エジプトの著名な女性ジャーナリストであるシャフィーク(A. Shafiq)の『女性は家に帰らないだろう』(A247)は、このような女性に対する保守的な世論の動きを批判するものである。彼女は、宗教家による「女性よ、家庭へ帰れ」という呼び掛けの背景には、少年非行、麻薬問題、子供の落第や中途退学、さらにはバスの混雑、交通渋滞、女性の多い管理部門の怠慢など、社会の欠陥や混乱の原因のすべてを女性の生産活動への参加と外出に帰する世論があることを指摘する。また、オイルグラットや累積債務の増大、年に数カ月間発生する米不足、失業問題などのような国家の経済的問題を女性の社会的道徳的問題に転化しようとする風潮だと見なすものである。

以上のような論議を巻き起こして成立した「半労半給」制度や2年間の無給育児休業制度は、女性に強制するものではなく選択を与えたことから、働く女性にとってはかなり有利な権利となった。しかし、このような女性を優遇した法的な権利の存在にもかかわらず、その適用において多くの問題が残っているのも事実である。この女性の労働権と実際の適用の問題を論じたものには、アブドゥル・ジャワード(A. S. 'Abd al-Jawād)の『エジプト女性の権利：法的規定と社会の制約の間で』(A250)がある。この文献は、女性労働権の実態について次のような問題点を指摘する。

- (1) 公務員法は、無給で育児休業を2年間、雇用期間中に3回の取得を認めているが、同時に、年俸の25%を占める社会保険を全額負担しなければならず、下層、中間層の女性労働者にとっては、厳しい経済環境のなかで大きな負担となる。
- (2) 100人以上の女性労働者が働く職場には、保育所の設置が義務づけられているにもかかわらず、これが十分に機能していない。たとえば、保育所設置から逃れるために、意識的に女性労働者数を制限したり、たとえ設置したとしてもかなり劣悪な設備であったりする。
- (3) 公務員法は「半労半給」制度を認めているにもかかわらず、役員会の承認を必要とするため、休暇は事実上、働く女性自らが有する権利ではない。

エジプトにおいても女性は、男性と同等の教育程度であったとしても、実際には職場において差別に直面することが多い。このような男女差別のなかには、イスラームの伝統的な解釈に影響を受けたものがある。たとえば、ミヒナー(A. F. Mihnā)の『女性と公的職業』(A273)は、エジプト古代史以来の女性の公的地位について扱ったもので、現代に関しては男女間の比

較における女性の労働状況を論じている。特に、政府、公的部門における女性労働者のなかには、男性に比べて高い能力を持つ女性が多いにもかかわらず、役職部門の男性の割合が高いため、実際には女性差別が起きている点を指摘する。また、特に裁判官、検察官などいくつかの部門において女性雇用を認めていないことについて、1952年2月20日に出された行政訴訟裁判所の判決が今でも効力を持っていると述べる。同判決は「国民議会議員、検察官、裁判官のようないくつかの職業が、女性ではなく男性に限定されているのは、この職業の特殊な適性にあるということにすぎない。当局はその職業の地位、相互関係、環境、慣習と伝統が持つさまざまな力関係に対して配慮を置くものである。しかし、これは、女性の価値を劣しめるものでも、女性の尊厳に影響を与えるものでもなく、また女性の道徳的文化的な水準を低下させたり、才能を拒絶したりさらには害を与えるようなものでもない。その職業自体が特有の環境にあるため、特別な適性を考慮した行政的評価である。(一部略) 法的平等の基盤を損なうようなものではないし、権力の誤用でないかぎり、誰もそのシステムを変えることができない。」というような曖昧な表現によって、当局が裁判官や検察官への女性の起用を拒否したものである。その後、女性の参政権が認められ、人民議会への女性の参加が実現したものの、これらの職業は女性に閉ざされたままである。このような判決の背景には、明らかにイスラーム法の影響が強いと思われる。

何人かの女性学者は、イスラームを利用した政治的動きを指摘する。そのひとり、アル・バーズ(S. al-Bāz)は『イスラーム法における女性の労働権』(A230)において、最近の現象について次のように評論している。「エジプト女性の家庭外における労働を拒否する復古的な意見は、

1967年戦争の敗北のショックと失望以降に発生した。すなわち、このような意見は、まさに失業と競争に悩んでいた労働市場へ女性の参入増加が予想される時期と呼応していた。その当時、男女間の役割分担システムが継続していたが、これは、歴史的な規制と発展から来るものであり、広範囲な物質的变化にもかかわらず、男女の間に心理的にも思想的にも深く根ざしたものである。また、経済的危機の増大は、特に母と妻としての伝統的役割と労働者としての経済的役割を持つ、働く女性の負担増加を招くものであった。したがって、このような復古的現象の裏には現実的な理由があったが、彼らはイスラームを服従強化の手段として使い、イスラーム教の真実の聖なる呼び掛けを隠すことを選んだのである。」(p.67~68) そして、女性の労働権に関する本質的なイスラームの認識を探り、著者は、コーランには女性の労働の禁止や許可について記述した箇所はなく、男女の共生やベールに関する記述は、ムハンマドの妻を対象としたものであるとし、イスラームにおいて女性労働を制約するものは何もないことを強調する。

III. 現代の政治社会変化と 女性労働の現状

1974年に始まるインフターフ政策の下にエジプトは、市場開放化に向けた一連の政策を実施したが、この時期は同時に、オイルグラの還流に乗った社会経済開発期でもあった。このような経済的変換期における女性労働を扱った論文は、大きく2つに分けられる。ひとつは、女性の労働参加拡大によって、また男性労働の代替的担い手として、女性の自立が強まり女性の地位が向上したと肯定的に捉えるものである。もうひとつは、大きな社会のうねりのなかで変化から取り残された女性、さらに女性をめぐる価値観の保守化現象の面から、女性の危機とし

て否定的にみたものである。まず最初に、両者の代表的な観点を紹介した後、都市や農村の女性労働を扱った文献を紹介してみよう。

前者の観点をとったものでは、サリバン(E. L. Sullivan)の『エジプトにおける女性と労働』(E210)がある。著者は、エジプトの女性労働を歴史的に概観し、また各種の統計データを分析してその発展過程を説明したうえで、インフターフの影響について述べる。これによると、民間企業、外資系企業の事務部門や、メイド、ウェイトレスなどのサービス部門に女性の雇用機会の増加がみられるとともに、湾岸諸国への出稼ぎ急増によって、男性の代わりに女性が多く職を占めるようになったとする。さらにまた、インフレによって高騰した生活費の補填と西欧から流入した消費物資の購入資金に充てるために女性の労働が一般化したと説明する。著者は、女性を取り巻いているさまざまな問題を認めているが、女性の高等教育の着実な発展からみて、エジプト女性の将来を楽観的に捉える。

一方、後者の側に立つものでは、まずアブドゥル・ワッハーブ(L. 'Abd al-Wahhāb)の『エジプト女性と社会参加』(A255)がある。著者は、石油とインフターフによって女性の社会参加形態が多様になったものの、実際には、社会、家庭における女性に対する価値観は変化しなかったと見なす。また社会経済開発は、金融部門が中心で農工業部門の開発に重点が置かれなかった結果、女性労働参加率は低下し女性失業率が上昇したと、かなり否定的に捉える。石油ブームの時期には、アラブ産油国への出稼ぎ者は、エジプト全労働力の約16.5%に上り、そのほとんどは男性であったという。この代替労働力として女性労働力が増加するように思われたが、逆に、女性労働力の減少傾向がみられ、失業率が上がったのが実状であった。これは出稼ぎに同伴する者には6カ月以上の休暇が許可

されたことによる一時的な女性休職者の増加と、出稼ぎによる収入増加のために職を離れる女性が増加したことによると著者は説明する。特にこのような現象は、中間層公務員など、公的部門の女性に多くみられた。一方、農村では、夫の出稼ぎによって、女性の家庭や社会での責任と農業労働は倍に増え、日常活動の50%を農作業に充て、また農繁期には80%を充てるまでに及んだという。

ところで、アラブ諸国の統計資料は、アラブ女性の経済活動への実状を示していない点で多くの研究者から批判されている。これについてはエジプトも例外ではない。エジプトでは1958/59年以降、『労働力標本調査』(E182)を毎年3月に実施していたが、1986年から10月に調査を行い、季節労働者の指標を含むようになった。また1983年以降には臨時・未組織部門の労働者をこの標本調査に含め、調査の改善をはかっている。そのため、女性労働者の全労働力に占める割合は1982年の5.8%から1983年には12.5%に上昇した。これは未組織部門の女性労働者の割合がかなり高いことを端的に表わしている。アンカーら(R. & M. Anker)の『エジプトにおける女性労働力の測定』(E178)は、この増加をおもに農業労働の測定方法の修正のためと説明する。また、予備的に測定方法の実験をしたところ、農村の女性は、家庭における重要な労働活動をほとんど労働と見なしていなかったと説明している。したがって、ILOの勧告である週10時間以上の労働について質問方法を改善したところ、80%の女性がこの基準を満たす賃金労働や商業活動に参加しているという結果を得たという。

一方、同様に『労働力標本調査』についてイブラーヒム(B. L. Ibrahim)は、『都市労働力の測定戦略』(E194)において、農業における女性労働者の測定方法やデータの質が改善されて

いるにもかかわらず、都市の女性労働力、特にインフォーマル部門の女性労働力の測定方法は、依然として不備なままである点を指摘している。たとえば、家の外で賃金労働に従事しているかどうかの主婦と働く女性を区別する基準であるため、裁縫のような家内労働は、主婦という範疇に分類される。また、女性の大多数は、主婦という地位を保つことが「正常」の状態と考えているという。著者は、測定方法の改善のために、都市のインフォーマル部門で働く女性に関する調査・研究の必要性をあげている。

しかし、以上のような政府の『労働力標本調査』の不備を補うために、1987年にCAPMASに労働情報組織プロジェクトが設置され、1988年10月に独自の労働力標本調査が行われている。この予備報告書(全11冊)のなかの『女性』(ザールーク[M. Zaaluk]著)(E219)には、女性労働力調査結果の概要と分析が報告されている。調査項目は、男女差別に関する意識調査、職場環境、結婚年数、女性の労働開始時の家族の反応、就労の動機、家庭環境等であり、労働環境調査といった側面が強い。また国勢調査と違い、この調査は賃金労働者と非賃金労働者の双方を含み、調査がなされた週に公式、非公式を問わず最低1時間以上雇用された労働者すべてを対象とするものである。したがって、女性労働参加率は国勢調査結果の約3倍になり、失業率はかなり低いという結果が出ている。著者は、この調査結果から、政府の構造再調整政策の期待に反して民間部門では男性を雇用する傾向が強く、女性労働力の参入が進んでいない点と女性労働力に対する保守化傾向を指摘し、次のようにまとめている。

(1) これまでなされたほとんどの研究は、女性労働者の大多数は子供を持たない未婚女性であるという指摘をしてきたが、実際には女性労働者の過半数は子持ちの既婚者であった。

- (2) 家庭においては仕事に対する妨害も奨励も特にみられず、また社会的な女性労働に対する保守化現象が現われているなかで、依然として女性が自分の労働に対する主体的な決定権をもっている。
- (3) 就労への動機は貧困から来るもので、家族の一員として家計に貢献し、家族の金銭的な必要を満たすためである。
- (4) 収入を直接に家族へ渡す女性は少なく、多くの女性はそれを家庭用品の購入に充てている。
- (5) 収入と家族の金銭的な必要のために、労働を継続することを望んでいる。

また、インフォーマル部門における女性労働を扱った文献としては、国連西アジア社会経済委員会(Economic and Social Commission for Western Asia : 以下ESCWA)の『カイロ市、庶民地区でのインフォーマル部門における女性と諸問題：調査研究』(A228)がある。インフォーマル部門の女性労働を扱った文献は非常に少ないため、これらの文献は貴重なものといえる。

また、都市下層の女性労働を調査した文献も何点かみられる。たとえば、マフムード(A. I. Maḥmūd)の『工場の社会組織における女性労働者の状況』(A265)(A266)は、カイロの繊維工場における女性労働者の実態調査である。これは職場での義務、権利における男女平等と、母親、妻、主婦としての役割を担う女性特有の環境の下で働く女性の状況を確定しようとしたものである。同様に、スリーマン(N. H. Suliman)の『女性労働者の福祉に関する評価』(E209)は、化学工場、毛織物工場で働く既婚女性200人の実態調査である。これらはいずれも、女性の生産性の低さの原因として、欠勤、遅刻が男性より多いことを指摘し、その理由として、育児や家族の病気介護、保育所不足、保育所施設の劣悪さ、遠距離通勤などの社会的要因をあげる

とともに、女性労働者の64.5%が非識字者、半識字者で技術を必要としない職に従事している現状を報告する。

さらに、ハンマーム(M. Hammam)の『エジプトの働く女性：ショブラ・ヘイマの繊維労働者』(E189)および、『エジプトにおける女性と工業労働：ショブラ・アル・ヘイマの事例』(E190)は、劣悪な労働環境や労働時間、通勤手段で働く繊維工場の女性労働者の実態を明らかにしている。

ファルガリー(F. Farghali)の『大カイロにおける女性の労働参加』(E185)は、女性労働力の地域的特性と労働参加率から説明しようとしたもので、大カイロにおける女性労働力の分布図が描かれている。著者は、女性の労働参加が質・量的にも社会や経済の近代化の指標になり得るという認識にたつものである。この調査は女性の労働参加と関連関係にある教育との関連で地域の考察を試みているが、不十分な説明に終わっている。

家族関係と女性労働を扱ったものでは、イブラーヒーム(B. L. Ibrahim)の『家族戦略：エジプトにおける女性の労働参加に関する見通し』(E193)がある。カイロの公営工場で働く若い女性たちに、家族環境、教育状況、就労の動機等についてインタビューしたもので、都市下層の労働意識、経済環境が説明されている。著者は、経済的必要性が都市における女性労働力の増加を促し、従来の女性労働に対する伝統的姿勢の根底を浸食しているという現実を確認する。

さらに中間層の女性労働については、モフセン(S. K. Mohsen)の『新しいイメージ、古い反映：エジプトにおける働く中間層女性』(E200)は、中間層の働く女性の具体的事例を紹介するものである。モフセンは、エジプト社会の経済的社会的変化という現実のなかで、女性に新しい役割として経済的貢献を強いる一方で、依然

として家庭での責任を強要する伝統的価値観が根強く残っているという、その両者のずれの大きい点を強調している。

最近、農村女性の地位と役割に関連させて彼女らの労働状況を実態調査した研究が多くみられるようになった。その多くは、エジプト系、またはアラブ系の欧米人社会学者、人類学者の手によるものと思われる。しかし、そのほとんどは、デルタ地域に集中したもので、エジプトで最も伝統的で閉鎖的な社会とされる上エジプトに関する実態調査は皆無といってよいかもしれない。デルタ地域の調査研究では、E S C W Aで刊行された『開発における農村女性の参加』(アブドゥル・マアティ [A. 'Abd al-Ma'ti] 等著) (A229)、『エジプト農村女性の実態調査』(A254)、アル・カツシャ(S. el-Katsha)の『女性、水、衛生設備；エジプトの二農村における家庭用水利用』(E196)、アバーザ(M. Abaza)の『農村エジプトにおける女性イメージの変化』(E175)などがある。これらの文献は、主に家庭労働、農業、畜産業などにおける女性の労働状況を調査している。

たとえば E S C W A 文献(A229)は、エジプトの農村女性の実態について各種の統計をもとに分析した部分と、農村女性を支援する各種プロジェクト、およびシャルキーヤ県とブヘイラ県の2農村の生産プロジェクトへの女性の参加に関する実態調査から成るものである。同文献によると、農村女性の労働の種類は、「牧草、小麦などの収穫、散水の補助、家畜の世話、搾乳、養鶏、パン焼き、小麦の保存、マカロニ、ジャムなどの食料製造」などである。このような労働に充てられた年間日数は、一日の平均労働時間を8時間とした場合、家畜の世話に34.3日、家族農業労働には、農繁期の5,6,9,10月だけで143.7日分が充てられ、合計178日になるという。特に、女性労働に依存するところが多いのは、

家畜の世話、チーズ、ジャムの製造などの酪農・食品加工である。この文献は、まず、女子教育の遅れによる労働機会の制約と政府による女性の整備、訓練、人的開発における都市偏重の傾向を指摘するとともに、農村文化の特殊性と諸問題を次のようにまとめる。

- (1) 家庭内労働に費やされる時間が多く、家庭外における労働の時間が少ない。
- (2) 習慣、伝統、風習が女性の社会的活動を妨げている。
- (3) 男性、すなわち、父、兄弟、夫の強制力が強く、女性が家庭外の社会的活動に参加するためには、彼らの許可を得る必要がある。
- (4) 女性自身が社会的活動への参加に対する能力や適性に欠けると堅く信じている。
- (5) 女性の本来的な役割は家庭労働であると信じている。

また、プロジェクトに関する実態調査では、その成功や失敗の原因を分析している。著者らの結論では、農村開発プロジェクトの問題点は、女性特有の問題によるのではなく、むしろ農村特有の問題、たとえば地縁や血縁に根ざした結びつきや社会的環境、生産物の販売や流通の問題などであると見なす。さらにこの文献は、この種のプロジェクトは、特に女性の生産活動への参加を支援する内容を含むものではないとし、1970～80年代の政府開発政策を痛烈に批判した内容を含み興味深い。

特に女性の酪農を扱った文献では、ズィツマーマン(S. D. Zimmerman)の『乳製品製造におけるエジプト女性の役割』(E221)および『カフル・アル・バフルのチーズ製造』(E220)がある。これらの文献は、メヌフィーヤ県カフル・アル・バフルにおける実態調査結果から、エジプト農業における畜牛の多様な役割、乳製品製造での女性のかかわり方を調査し、衛生面などの改善を提言している。

農村の女性労働の変化をエジプト経済の変化と関連させて論じたものに、サウンダーとメヘンナ(L. W. Saunders, S. Mehenna)の『見える手；エジプト農村における女性農業労働』(E207)がある。著者は、小規模地主の割合が高いデルタ地方において継続的な農村調査を行い、1962年、78年の調査データを比較している。この結果は、女性の労働が農耕労働から、現金収入につながり農村経済を拡大させるような家禽や牛の飼育および乳製品製造などの畜産業へと変化したことを示すものである。

湾岸諸国への女性の出稼ぎの数は、社会犯罪研究センターの報告によると1970年代の出稼ぎ者の約3分の1とされている。しかし、女性の出稼ぎを扱った実態調査は少ないと思われる。わずかにアブドゥル・ジャワード(A. 'Abd al-Jawād)の『海外へのエジプト女性の出稼ぎ要因』(A251)があり、その傾向を知る手がかりとなるかもしれない。

ところで、農業労働における男女の性別区分と賃金格差について論じたものに、トス(J. Toth)の『プライド、隔離(プルダ)または賃金；エジプト農村において男女の労働区分を維持させ

ているものは何か』(E211)があり興味深い。著者は、中東における男女間の労働について論じるうえでよく使われる、男女の「分離した活動」、「別個の範疇」というような型にはまった言い回しについて検討している。それによると、エジプトにおいても遊牧民的な男女分離や労働の種類や時期における相違が認められるという。しかしその反面で、農業労働における男女の同等な参加形態が存在し、男女を問わず労働の種類によって賃金格差が存在した点も指摘する。その根拠としてエジプトに存在するタラヒールと呼ばれる未熟練の季節労働者が、女性の労働とされる綿花の収穫に従事する時、自尊心を傷つけられながらも女性労働者と同じ賃金に甘んじなければならなかった例を説明する。しかし、1961年に始まった第1次5カ年計画以降、このようなタラヒール労働者が高賃金を獲得するために急速に建設・土木労働に移っていったことによって農業労働力不足を招き、結果的にタラヒール労働者の賃金の高騰を招いたという。他方で、女性は低賃金のまま抑さえられるか、また徐々に農業労働から隔離した家庭内労働に向かっていったというものである。

<文献目録—アラビア語>

- (A222) أبو العنين، عبد الشافى محمد: الأثار النفسية والاجتماعية والاقتصادية لاختلاف الاراء حول مشروعية عمل المرأة. (مؤتمر دور المرأة فى التنمية) القاهرة، 1980. 8 ص .
- (A223) أبو زيد، حكمت: معالم الطريق أمام المرأة العاملة. القاهرة، ادارة المعلومات العامة بوزارة الشؤون الاجتماعية، 1964. 75 ص .
- (A224) أبو زيد، محمود: المرأة والعمل اليدوى. القاهرة، مركز دراسات المرأة والتنمية كلية البنات الاسلامية جامعة الازهر، 1979. 19 ص .
- (A225) أحمد، أحمد طه: المرأة كفاحها وعملها. القاهرة، دار الجماهير، 1964. 120 ص .
- (A226) اسماعيل، علية محمد: القوى العاملة وأثرها فى التنمية الاقتصادية. (مؤتمر شئون المرأة العاملة) القاهرة، وزارة الشؤون الاجتماعية، 1963: ص 101-126 .
- (A227) أفلاطون، انجى: نحن .. النساء المصريات. القاهرة، 1949. 114 ص .
- (A228) الأمم المتحدة. اللجنة الاقتصادية والاجتماعية لغربي آسيا: دراسة استطلاعية حول خصائص ومشكلات المرأة فى القطاع غير الرسمي فى حى شعبي بمدينة القاهرة. بغداد، 1989. 129 ص . (سلسلة دراسات عن المرأة العربية فى التنمية، 15)
- (A229) الأمم المتحدة. اللجنة الاقتصادية والاجتماعية لغربي آسيا: مشاركة المرأة الريفية فى التنمية - دراسة حالة لبعض المشروعات الانتاجية فى القرية المصرية. تأليف عبد الباسط عبد المعطى وآخرون. بغداد، 1988. 114 ص .
- (A230) الباز، شهيدة: المرأة وحق العمل فى الشريعة الاسلامية. (ندوة المرأة والتنمية القومية) القاهرة، المركز الاقليمي العربى للبحوث والتوثيق فى العلوم الاجتماعية، 1984: ص 65-71 .

- (A231) بكر، عبد الرحمن: المرأة العاملة فى ج. ع. م. القاهرة، الدار القومية للطباعة والنشر، 1963. ص 62 .
- (A232) البندارى، عبد الوهاب: الزوجة العاملة والحقوق الزوجية. القاهرة، المطبعة العالمية، 1969. ص 93 .
- (A233) التطاوي، نادية: ميزانية الاسرة العاملة بالصناعة فى مصر. المجلة الاجتماعية القومية (1/3)، 14، 1977: ص 33-71 .
- (A234) جاد، منى محمد على: دور المرأة فى النشاط الاقتصادى والاجتماعى فى ج. م. ع. القاهرة، معهد التخطيط القومى. ص 48 .
- (A235) جاد الله، سعاد: أثر التدريب المهنى فى انتاج المرأة. (مؤتمر شئون المرأة العاملة) القاهرة، وزارة الشئون الاجتماعية، 1963: ص 151-162 .
- (A236) الجهاز المركزى للتعبئة العامة والاحصاء. مركز الأبحاث والدراسات السكانية: المرأة المصرية فى عشرين عاما، 1952-1972. القاهرة، ص 82 .
- (A237) حسن، عماد الدين: المرأة العاملة والثقافة العمالية. (المؤتمر الاول للمرأة) القاهرة، أمانة المرأة بالاتحاد الاشتراكى العربى، 1975. ص 20 .
- (A238) حسين، محمد أحمد: مقتطفات حول حق المرأة فى العمل. (مؤتمر الأول للمرأة العاملة) القاهرة، أمانة المرأة بالاتحاد الاشتراكى العربى، 1975. ص 13 .
- (A239) حلمى، عنيات: المرأة المصرية وتشريعات العمل. (ندوة المرأة والتنمية القومية) القاهرة، المركز الاقليمى العربى للبحوث والتوثيق فى العلوم الاجتماعية، 1984: ص 80-94 .
- (A240) حليم، نادية: بعض مشكلات المرأة العاملة، المؤتمر الدولى الثانى للاحصاء والحسابات العلمية والبحوث الاجتماعية. القاهرة، جامعة عين شمس، 1977: ص 55-70 .

- (A241) حنا، عزيز: الركائز السيكولوجية للمرأة العاملة . المجلة الاجتماعية القومية (1/3) 14: 1977 . ص . 169-184 .
- (A242) خليفة، اجلال: الحركة النسائية الحديثة - قصة المرأة العربية على أرض مصر. القاهرة، المطبعة العربية الحديثة، 1973 . 271 ص.
- (A243) رمزي، ناهد: تطور خروج المرأة المصرية الى مجال العمل. (تغيير الوضع الاجتماعى للمرأة فى مصر المعاصر، اشراف مصطفى سيوف) القاهرة، المركز القومى للبحوث الاجتماعية والجنائية، 1974 : ص 82-173 .
- (A244) سالم، لطيفة محمد: المرأة المصرية والتغيير الاجتماعى 1919-1945 . القاهرة، الهيئة المصرية العامة للكتاب، 1984 . 201 ص .
- (A245) سعد، محب الدين محمد: المرأة العاملة فى تشريعات العمل والتأمينات الاجتماعية . القاهرة، وزارة العمل، 1971 . 52 ص
- (A246) السعيد، أمين: حول القوانين المقترح المرأة العاملة . الحوا، 1975 .
- (A247) شفيق، أمينة: العمل المنتج والمرأة . (ندوة المرأة والتنمية القومية) القاهرة، المركز القومى للبحوث الاجتماعية والجنائية، 1984 : ص 15-21 .
- (A248) شفيق، أمينة: المرأة لن تعود الى البيت. القاهرة، دار الثقافة الجديدة، 1987 . 36 ص .
- (A249) عبد الجواد، أنعام: أساليب التنشئة الاجتماعية لدى مجموعة من الأمهات العاملات والأمهات غير العاملات المتعلمات فى أسر قاهرية . المجلة الاجتماعية القومية (1/3) 16: 1979 : ص 99-120 .
- (A250) عبد الجواد، أنعام: حقوق المرأة المصرية بين التحديد القانونى وتحديات الواقع الاجتماعى. (ندوة المرأة والتنمية القومية) القاهرة، المركز الاقليمى العربى للبحوث والتوثيق فى العلوم الاجتماعية، 1984 : ص 22-31 .

- (A251) عبد الجواد، أنعام: دوافع هجرة المصريات للخارج. فكر (13) اكتوبر 1988: ص 52-65.
- (A252) عبد الفتاح، كاميليا: سيكولوجية المرأة العاملة. بيروت، دار النهضة العربية، 1984، ص 324.
- (A253) عبد اللطيف، حمدي عبد العظيم: أثر قيمة التعليم وعمل المرأة على نوع النشاط الاقتصادي المصري. المجلة العلوم الاجتماعية (3) 16 خريف 1988: ص 119-136.
- (A254) عبد المعطي، عبد الباسط: الوضع الاجتماعي للمرأة القروية المصرية، تحليل تاريخي معاصر. المجلة الاجتماعية القومية (2) 12، 1975: ص 121-136.
- (A255) عبد الوهاب، ليلي: المرأة المصرية والمشاركة الاجتماعية. فكر (13) اكتوبر 1988: ص 34-42.
- (A256) العدوى، محمد زكى: اتجاهات المتعلمين نحو عمل المرأة فى مصر. القاهرة، جامعة عين شمس. مركز بحوث الشرق الأوسط، 1983.
- (A257) عماره، مشيرة أحمد محمد: تخطيط الخدمات التى تساعد المرأة العاملة فى مصر على تربية النشء. القاهرة، معهد التخطيط القومى. 125 ص.
- (A258) فرج، صفوت وناهد رمزى: عودة المرأة الى البيت بنصف أجر. القاهرة، المؤتمر الدولى الثانى للاحصاء والحسابات العلمية والبحوث الاجتماعية، 1978، ص 217.
- (A259) فرج، صفوت وناهد رمزى: قياس الرأى العام تجاه عودة المرأة الى البيت بنصف أجر. المجلة الاجتماعية القومية (1/3) 14، 1977: ص 145-168.
- (A260) فهمى، سمية أحمد: مشكلات الطفولة الناتجة عن عمل المرأة. (مؤتمر شئون المرأة العاملة) القاهرة، وزارة الشئون الاجتماعية، 1963.

- (A261) قنديل، بثينة أمين وأمينة محمد كاظم: اتجاه الفتاه المتعلمة نحو عمل المرأة. القاهرة، مكتبة الأنجلو المصرية، 1976. ص 126.
- (A262) لطفى، مصطفى كمال: المرأة العاملة فى قانون التأمينات الاجتماعية. (مؤتمر الأول للمرأة العاملة) القاهرة، أمانة المرأة بالاتحاد الاشتراكى العربى، 1975. ص 150.
- (A263) مجموعة المهتمات بشئون المصرية: الحقوق القانونية للمرأة المصرية بين النظرية والتطبيق. القاهرة، 1988. ص 44.
- (A264) محمد، أحمد طه: المرأة المصرية بين الماضى والحاضر. القاهرة، مطبعة دار التاليف، 1979. ص 254.
- (A265) محمود، عفاف ابراهيم: وضع المرأة العاملة فى التنظيم الاجتماعى للمصنع. المجلة الاجتماعية القومية (1/3)، 14، 1977: ص 3-31.
- (A266) محمود، عفاف ابراهيم: بحث وضع المرأة العاملة فى التنظيم الاجتماعى للمصنع. القاهرة، المركز القومى للبحوث الاجتماعية والجنائية، 1976. ص 90.
- (A267) مرسى، نادية: المرأة والعمل فى الحقبة النفطية. فكر (13) 1988: ص 43-51.
- (A268) مرقص، وداد: اتجاهات العمالة النسائية فى مصر، 1960-1976 -دراسة ديموجرافية اجتماعية. القاهرة، المركز القومى للبحوث الاجتماعية والجنائية، 1981. ص 53.
- (A269) مصر. وزارة التربية والتعليم: بحث وعلاج مشكلات المرأة والموظفة. القاهرة، مكتبة المستشار الفنى، لجنة بحوث شئون المدرسات والموظفات، 1959. ص 187.
- (A270) مصر. وزارة الشؤون الاجتماعية: متابعة توصيات المرأة العاملة. (مؤتمر الاسرة) القاهرة، 1964: ص 407-454.

- (A271) مصر. وزارة الشؤون الاجتماعية. اللجنة الدائمة لشؤون المرأة :
بحث ميداني للتعرف على مشكلات المرأة العاملة فى الاسرة والعمل
والمجتمع . (مؤتمر شؤون المرأة العاملة) القاهرة، وزارة
الشؤون الاجتماعية، 1963 : ص 170-206.
- (A272) مصطفى، أحمد سيد: العمالة النسائية فى مصر. المجلة الاجتماعية
القومية (1/3)، 14، 1977 : ص 283-307.
- (A273) مهنا، أميمة فؤاد: المرأة والوظيفة العامة. القاهرة، دار
النهضة العربية، 1984 . ص 330 .
- (A274) نايل، صابر أحمد: قضية المرأة العاملة والراسمالية المصرية .
اليقظة العربية (11)، 2، 1986 : ص 114-128.
- (A275) يحي، محمد كمال: الجذور التاريخية لتحرير المرأة المصرية فى
العصر الحديث - دراسة عن مكان المرأة فى المجتمع المصرى خلال
القرن التاسع عشر. القاهرة، الهيئة المصرية العامة للكتاب،
1983 . ص 131 .

<文献目録—欧語>

- (E175) Abaza, Mona : The changing image of women in rural Egypt. Cairo, American University in Cairo, 1987. 119 p. (Cairo papers in social sciences, 10(3))
- (E176) Ahdab-Yehia, May : Women, employment, and fertility trends in the Arab Middle East and North Africa. (The fertility of working women : a synthesis of international research, edited by Stanley Kupinsky) New York, Praeger, 1978 : p.172-187.
- (E177) Allan, E. M. : Egypt ; Islam, women's industrial work patterns and male labour structures. (Women and the Industrial Development Decade in Africa ; United Nations ECA/ATCRW Research Seminar) 1986.
- (E178) Anker, Richard & Martha Anker : Measuring the labour force in Egypt. International labour review 128(4) 1989 : p. 511-520.
- (E179) Azzam, Henry : The participation of Arab women in the labour force ; development factors and policies. Geneva, Population and Labour Policy Programme, World Employment Programme, ILO. 1979. (Working paper No. 80)
- (E180) Badran, H.: Arab women in national development ; a study of three Arab countries, namely Egypt, Lebanon and the Sudan. 1972 (A paper presented at the Conference on the Role of Arab Women in National Development)
- (E181) Cairo Demographic Centre : Aspects of manpower in Arab countries. Cairo, 1972. (Research monograph series, no. 3)
- (E182) Central Agency of Public Mobilization and Statistics : Labour force sample survey, 1958/59-1990. Cairo.
- (E183) Central Agency of Public Mobilization and Statistics. Population and Research Studies Center : The Egyptian woman in two decades, 1952-1972. Cairo, 1974.
- (E184) Fahim, Fawzia : Professional women in Egyptian radio and television. (Women and media decision-making ; the invisible barriers) Paris, UNESCO, 1987 : p. 81-194.

- (E185) Farghali, Fathi : Female labour force participation in Greater Cairo. (Studies in African and Asian demography ; Research monograph series, Cairo Demographic Centre Seminar 1982) Cairo, 1982 : p. 367-380.
- (E186) Fergany, N.: Arab women and national development ; a demographic background. Cairo, American University in Cairo Press, 1973.
- (E187) Garzouzi, Eva : The demographic aspects of women's employment in the United Arab Republic. Egyptian population and family planning review (3) 1970 : p. 93-98.
- (E188) Gran, Judith : Impact of the world market on Egyptian women. MERIP reports (58) 1977 : p. 3-7.
- (E189) Hammam, Mona : Egypt's working women : the textile workers of Chubra el-Kheima. MERIP reports (82) Nov. 1979 : p. 3-7.
- (E190) Hammam, Mona : Women and industrial work in Egypt : the Chubra el-Kheima case. Arab studies quarterly 2, 1980 : p. 50-69.
- (E191) Hatem, Mervat : Egypt's middle class in crisis ; the sexual division of labour. Middle East journal 42, 1988 : p. 407-422.
- (E192) Ibrahim, Barbara Lethem : Cairo's factory women. (Women and the family in the Middle East ; new voice of change, edited by Elizabeth W. Fernea) Austin, University of Texas Press, 1985 : p. 293-299.
- (E193) Ibrahim, Barbara Lethem : Family strategies ; a perspective on women's entry to the labor force in Egypt. (Arab society ; social science perspectives, edited by Saad Eddin Ibrahim & Nicholas S. Hopkins) Cairo, American University in Cairo Press, 1985 : p. 257-268.
- (E194) Ibrahim, Barbara Lethem : Strategies of urban labor force measurement. (Urban research strategies for Egypt, edited by Richard Lobban) Cairo, American University in Cairo, 1983 : p. 46-54. (Cairo papers in social science 6(2))
- (E195) Issa, M.: The Egyptian women's participation in labor force : secular trends, age pattern and determinates, 1907-1976. Cairo, CAPMAS, 1979.

- (E196) el-Katsha, Samiha, et al.: Women, water, and Sanitation ; household water use in two Egyptian villages. Cairo, American University in Cairo, 1989. 96 p. (Cairo papers in social science 12(2))
- (E197) Lesch, Ann Mosely & Earl L. Sullivan : Women in Egypt ; new roles and realities. UFSI reports (22) 1986 : p. 1-9.
- (E198) Lynch, Patricia D. & Hoda Fahmy : Craftswomen in Kerdassa, Egypt. Geneva, ILO, 1984, 90 p.
- (E199) Marcos, W.: Employment of women and fertility. Egyptian population and family planning review (7) 1974 : p. 21-29.
- (E200) Mohsen, Safia K.: New images, old reflections ; working middle-class women in Egypt. (Women and the family in the Middle East ; new voice of change, edited by Elizabeth W. Fernea) Austin, University of Texas Press, 1985 : p. 56-71.
- (E201) Morsy, Soheir A.: Rural women, works and gender ideology ; a study in Egyptian political economic transformation. (Women in Arab society ; work patterns and gender relations in Egypt, Jordan and Sudan, by S. Shami et al.) Providence, R.I., Berg/UNESCO, 1990 : p.87-159.
- (E202) Papanek, Hanna & Barbara Ibrahim : Economic participation of Egyptian women : implications for labor force creation and industrial policy. Cairo, USAID, 1982.
- (E203) Ramzi, Sonia Abadir & Centre for Social Science Research and Documentation for the Arab Region : Women and development planning : the case of Egypt. (Women and economic development ; local, regional and national planning strategies, edited by Kate Young) Oxford, Berg/UNESCO, 1988 : p. 111-134.
- (E204) Rugh, Andrea B. : Conceptual consideration in development programs for women ; women and work in Bulaq. (Proceedings of the International Seminar on Rural Women & Development, edited by Mourad Wahba) Cairo. Ain Shams University, 1980 : p. 35-50.
- (E205) Rugh, Andrea B.: Family in contemporary Egypt. Syracuse, Syracuse University

Press, 1985. 305 p.

- (E206) Rugh, Andrea B.: Women and work ; strategies and choices in a lower-class quarter of Cairo. (Women and the family in the Middle East ; new voices of change, edited by E. W. Fernea) Austin, University of Texas Press, 1985 : p. 273-288.
- (E207) Saunders, L. W. & S. Mehenna : Unseen hands ; women's farm work in an Egyptian village. *Anthropological quarterly* 59(3) 1986 : p. 105-114.
- (E208) Soueif, M. & Nahid Ramzy : The changing role of women in contemporary Egypt ; design for a fact finding survey. *National review of social sciences* 12(2/3) Sept. 1975 : p. 1-20.
- (E209) Suliman, Nadia Halim : An evaluation of some services offered to women at work. *National review of social sciences* 14(1/3) 1977 : p. 3-16.
- (E210) Sullivan, Earl L.: Women and work in Egypt. (Women and work in the Arab world, edited by Earl L. Sullivan & Karima Korayem) Cairo, American University in Cairo, 1981 : p. 1-44. (Cairo papers in social science 4(4))
- (E211) Toth, James : Pride, purdah, or paychecks ; what maintains the gender division of labor in rural Egypt? *International journal of Middle East studies* 23(1) Jan. 1991 : p. 213-236.
- (E212) Tucker, Judith : Decline of the family economy in mid-nineteenth century Egypt. *Arab studies quarterly* 1, Summer 1979 : p. 245-271.
- (E213) Tucker, Judith : Egyptian women in the work force ; historical survey. *MERIP reports* (50) 1983 : p. 3-9.
- (E214) Tucker, Judith : Women in nineteenth century Egypt. Cambridge, Cambridge University Press, 1985. 251 p.
- (E215) Youssef, Nadia H.: Differential labor force participation of women in Latin America and Middle Eastern countries : the influence of family characteristics. *Social forces* 51, 1972 : p. 135-153.

- (E216) Youssef, Nadia H.: Social structure and the female labor force : the case of women workers in Muslim Middle Eastern countries. *Demography* 8(4) 1971 : p. 427-439.
- (E217) Youssef, Nadia H.: Women and agricultural production in Muslim societies. (Paper presented at the seminar, Prospects for growth in rural societies : with or without active participation of women) Princeton, New Jersey, 1974.
- (E218) Youssef, Nadia H. : Women and work in developing societies. Berkeley, Institute of International Studies, University of California, 1974 & Westport, Greenwood Press, 1976. 137 p.
- (E219) Zaaluk, Malak : Women. Cairo, CAMPAS, 1990. 56 p. (CAPMAS Labour Information System Project, preliminary report, SG/1)
- (220) Zimmermann, S. D.: The cheese makers of Kafr el Bahr : the role of women in Egyptian animal husbandry and daily production. Leiden, Women and Development Centre, University of Leiden, 1982.
- (E221) Zimmermann, S. D.: The role of Egyptian women in daily production. (Proceedings of the International Seminar on Rural Women & Development, edited by Mourad Wahba) Cairo, Ain Shams University, 1980 : p. 13-33.
- (E222) Zimmermann, S. D.: The women of Kafr el Bahr. Research into the working conditions of women in an Egyptian village. Leiden, Women and Development Centre, University of Leiden, 1982.
- (E223) Zurayk, Huda : Women's economic participation. (Population factors in development planning in the Middle East, edited by F. C. Shorter & H. Zurayk) New York/Cairo, Population Council, 1985 : p. 3-68.